

ラジオ放送
＜令和4年7月～9月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.440

もくじ ~ contents

<金光教案内>

☞ 作家・かんべむさしさんによる金光教の紹介

- かんべむさしの金光教案内 4 第1回 page 1
- かんべむさしの金光教案内 4 第2回 page 5
- かんべむさしの金光教案内 4 第3回 page 9
- かんべむさしの金光教案内 4 第4回 page 13
- かんべむさしの金光教案内 4 第5回 page 17

<平和>

☞ 戦争体験者のお話

- この神さんのおかげで助かったんですよ page 21
兵庫県・姫路西教会 黒岩緋佐子
- 敵も味方もない page 25
福岡県・合楽教会 稲垣明子

<教師インタビュー>

☞ 金光教の先生へのインタビュー番組

- 一生懸命、丁寧に page 30
広島県・草津教会 岸野美輝
- 祈り page 34
大阪府・天王寺教会 橋口美紀

<あなたへの手紙>

☞ 悩みや疑問にお答えします。

- 第1回 娘に友だちができない page 39
／父親が熱心な信者
- 第2回 神様にお願いしたのに良い点が取れない page 43
／死んだらどこに行くの？
- 第3回 ちょっとしたことイライラする page 47
／どうして信心するのか
- 第4回 認知症の母の介護 page 52
／会話ができない息子

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内4」

第1回

おはようございます。かんべむさしと申しま

す。職業は作家でございます、日本文藝家協会きようかいと、日本SF作家クラブの会員になって

おります。また金光教には、40代の後半になってから、御縁を頂きました。

で、そんな私が、今朝から週1回で5週にわたって、金光教の教祖様、「様」と言うとうどうも硬くなりますので、失礼して「さん」と言わせていただきますが、教祖さんと、その教えを受けた、当時の信者の方々のお話をさせていた

だくことになりました。

それにつきましては、資料として、金光教の教典と教祖さんの伝記を使わせていただきますが、実は私はこの2冊を、神聖な書物というよりは、非常に興味深い、面白い本として読ませていただいております。

というのが、まず分厚い教典の大半が、いろんな信者さんたちのエピソード集になっておりまして、時は幕末から明治時代、所は教祖さんがおられた備中大谷びつちゅう、今の岡山県浅口市金光町を中心とした山陽地方。

それから、教祖さんの教えを受けた信者さんたちが布教に出られた中国・四国や九州、さらには近畿地方まで。伝記には、その時代と環境の中での人々の暮らしぶりや世の中の様子が、実にリアルに描かれてるんですね。

ですから、教典も伝記も私にとっては、「面白い本」「幕末や明治時代の勉強になる本」でもありますので、その思いを土台にして、お話をさせていただきたいと思います。

そこで、まず教祖さんの紹介でございますが、教祖さんは元々は備中大谷で、農業をしておられた方です。子どもの頃から神仏に参るのが好きで、温和で正直な人でしたが、一方では不幸や不運にもたびたび見舞われました。子どもを3人も亡くすとか、自分も大病をするとか、農家にとっては家族同然の牛が2頭も死ぬとかでして、それらの苦難をとおして信心を進めるうちに、神様とお話をさせてもらえるようになられたんですね。

私なりの解釈ですけど、この宇宙には大いな

る意思があまねく満ち渡っており、それを人間は神と呼んでる。そしてその意思を感じ取れた人がいて、その意思に沿って生きるようにと、大勢の人々に説いていく。

大いなる意思と、それを感じ取った人と、大勢の民衆。古今東西の宗教には、この三者関係を基本にして始まったものが多いわけで、その意味では金光教も、単なる地方の民間宗教ではなく、時代や国境を越えて通用する普遍宗教の一つだと、私は思いました。

で、話を戻しまして、神様とお話をさせてもらえるようになられた教祖さんは、人々の頼みに応じて、願いの成就や難儀の解決を神に祈念し、かなえてもらえるようになられました。神と人との仲立ちになって、人の願いや悩みを神

に取り次ぎ、神の思いを人に取り次いで、その人に合った生き方を教えていく。それでこれを「取次とりつぎ」と申しまして、今でも金光教の根本になっている働きです。

そして、教祖さんはその「取次」を、農業をしながら続けておられたんですが、神様から、「世間には難儀に苦しむ者が大勢いるから、農業をやめて取次に専念して、助けてやってくれ」と頼まれました。そこでそれからは、明治16年に亡くなられるまで大方25年間、自宅である農家のひと部屋に座り続けて、人助けに励まれましたですね。

ただし教祖さんは、一足飛びにそんなレベルに到達されたわけではありません。最終的に神様から、御自身のお名前は「天地金乃神てんちかねのかみ」であ

ると教えられ、教祖さんには「生神金光大神いきがみこんこうだいじん」、大きな神と書いて大神だじんですが、そういう神としての名前が与えられたのは、神様から命じられた厳しい修行を経てのことです。ですから教祖さんは、この「生神」も、「ここに神が生まれる」という意味で、誰でも信心を進めればそうなれますよと教えておられます。

教典や伝記によりますと、とにかく教祖さんは、神様から命じられたことは、全てそのまま、そのとおりにするという、そういう修行を続けられたそうです。ですから、まだ農業をしておられた時、冬でも「裸足で行け」と言われたり、夏になっても「蚊帳かやをつるな」と命じられたり。のちには、「ひと晩中、外で踊っておれ」と命じられてそうなされたとか、「金を拾わせてや

るから西へ行け」と言われて、弁当持ちで延々と歩いたけど、金なんかどこにも落ちてなかったとか、常識で考えたら「何の意味があるねん」と思うような話も残っております。子どもの頃に、遊び仲間の賭け事に誘われて大負けして、親からきつく叱られたなんてエピソードもあります。

つまり教祖さんは、最初から何もかも立派で偉かったという人ではなかったということで、私は御縁を頂いた当初、そういった事実や、それを教典や伝記に隠さず書いてるという姿勢が信用できると感じました。

そして、金光教はこちらの悩みや願いを聞いて、その解決や成就を祈ってくれるし、賽銭さいせんやお供えは自由だし、他の宗教も否定しない穏や

かな宗教だということも分かりましたので、現在までの20何年間、教会に通わせていただいているわけです。

はい。というところで、時間が来ました。来週は、その時代に大阪へ布教に出てこられた信者さんのお話をさせていただきます。ありがとうございます。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内4」

第2回

な信者さんも大勢おられます。
そこで今朝はその中の一人、明治時代の初期に大阪へ布教に出てこられた、白神新一郎という方のお話をさせていただきます。

おはようございます。「かんべむさしの金光教案内」。先週はまず、幕末から明治の前半という時代に、備中大谷、今の岡山県浅口市金光町で人助けをしておられた教祖さんの紹介をさせていただきました。

金光教の根本である取次。つまり神と人とを取り次いで、難儀の解決や願いの成就を祈ってください。病気や貧困、縁談や商売。それぞれの

の問題を解決してもらえた人がたくさんいたわけで、中には助けてもらったありがたさから、自分も布教に出て人助けを始めたという、そん

白神新一郎さんは、岡山の城下町で「備中^{びちゆう}屋^や」という、藩の年貢米も扱う、大きな商売をしていた家の跡取り息子でした。裕福な家で恵まれた立場ですから、学問も身に付けてたし、書道や茶道も習ったそうです。ところがその白神さん、家を継いで順調に商売をしておられたんですが、40歳前に息子さんの一人が3歳で亡くなってしまうました。

おまけに41歳の時には眼の病気を患って、医者よ薬よと手を尽くしたんですけど、とうとう失明してしまっただけです。

そこでそれから折りに触れて、人に手を引いてもらいながら、あちこちの神社仏閣に参り、眼病の全快を願いつけたんです。岡山から山を越えて山陰地方、海を渡って四国にも脚を伸ばして、願掛けをされたそうです。

でも、やっぱり治らないし、その間、大方10年ほどの間に、さらに息子さんが2人亡くなっ
てしまいました。そして時代が変わった明治2年、教祖さんの教えを受けた方が、地元の岡山で布教を始めておられたんですが、縁があつて白神さんはその方から、教祖さんのことや、その教えを聞かせてもらいました。

金光教の教典や伝記には、「神は親で、人間はその子である。神は子どもがかわいいという
思い以外、何も無い」とか、「人が助かつてく

れなければ、神も助からない」とか、「どんなことでも遠慮なく願え。神は頼まれるのが役目である」とか、私の好きな、非常に優しい雰囲
気の教えが載っております。

ですから白神さんも、そんな教えを聞かせてもらつて、「前代未聞の教えだ。これまで自分が思つてた宗教とは違う」と感激して、たちまち熱心な信者になられたんですね。そしてその翌年には、教祖さんのところに何度も参拝して、信心を進められました。もちろん眼病のことも願つてたんでしようし、教祖さんも全快を祈つてくださつてたんでしよう。そしたらその年の年末に、ぼんやりとながら物の影が見えだして、それをきっかけに、10年越しの眼病が治つたんですね。

さあ。それで白神さん、大感激も感謝もして、人にもこの神様のありがたさを伝えたいと、見えるようになった眼で、「御道案内」という本を書かれました。学問のある方ですから、「神儒仏、いずれに愚かはなけれども」、つまり「神道も儒教も仏教もそれぞれ良い教えですが、なかでも私が助けていただいた神様は：」という、そんな意味の言葉で始まる簡潔な文章です。書道も身に付けてらしたので、原本の写真版を見ると、御家流の達筆です。

そして明治8年、当時としてはもう高齢者である57歳で、商売を息子さんに譲って大阪へ出てこられて、布教所を開かれました。

参ってくる人の話を親身になって聞いて、難儀の解決や願いの成就を神様に祈ってあげる。

そしたらそれが次々に実現する。いわゆる「靈験あらたか」なので評判になって、東区伏見町の布教所の前には、狭い道に参拝者の人力車がずらっと並んだそうです。

私、長年の上方落語ファンで、昔の大阪の町の話なんか好きですので、初めてこのエピソードを読んだ時には、思わず「面白いなあ！」と声を上げておりました。

そして、この白神新一郎先生の布教所は、のちに西区の立売堀に移って発展し、今も続いている金光教大阪教会になりました。64歳で亡くなられ、商売をした息子さんが跡を継ぐことになったんですが、教祖さんに、「私は何も存じませんので」と不安を訴えたら、「そう心配しなくても、信者には心に浮かんだことを、その

まま言つてやれ。神様がそれに合わせてくださればよからうが」と、そう言つてもらえたという、これもまた「面白いなあ！」と思つた話も残っております。

　　というわけで、今朝は子どもを亡くすとか失明するとか、そんな苦難を経て信者になり、のちには徳の高い取次者になられた白神新一郎先生のお話をさせていただきましたが、もちろん、金光教はただ単に人の難儀や願いを解決してくれるだけの宗教ではありません。それをおして、神の思いに添つて生きるということを教えていく宗教で、白神先生は壮年になつてからその道を知り、その後、老年に至るまで人助けを続けて、亡くなられたわけですね。偉い方だと、素直に思います。

　　はい。それでは来週は、教祖さんの教えに触れて、性格がころつと変わった信者さんのお話をさせていただきます。ありがとうございます。ありがとうございました。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内4」

第3回

おはようございます。「かんべむさしの金光教案内」。これは私が金光教に40代半ばで御縁を頂き、教典や教祖さんの伝記を読ませてもらって、「面白いなあ」と実感したお話をさせていただけます。

そこで3回目の今朝は、明治の初めに信心を始められた、片岡次郎四郎かたおかじろうしろうという方のお話をさせていただけます。

片岡次郎四郎さんは、幕末時代、備中の国の才崎さいざきというところで、農業をしておられた方です。今は岡山市の一部になっておりますが、そ

の時代は田園地帯で、見渡す限り田んぼや畑が広がってたそうです。

そして、片岡さんの家は代々の旧家で、周囲からも一目置かれてたんですが、子どもが生まれては死に、生まれては死にして、どうしても育たない家でした。村の人たちが、「金神こんじん様のたたりじゃ」とか、「金神様に御無礼があつて、家屋敷が絶えるそうな」とか、うわさをするようになってたんです。

金神というのは、昔からの言い伝えで、人に罰を当てる怖い神様だとされてた存在でして、当時のことです。片岡さんもそれを気にして、「うちの家には、かつて人に恨まれるようなことをした者がおるでもなし、家を建て替える時でも、ちゃんと日柄や方角を見てやってき

たのに」と思いました。

「どこぞに金神様を祀まつつてるところがあったら、そのあたりのことを、合点がいくまで聞いてみたい」とも考え出してたんです。そして明治元年、縁があつて片岡さんは、自分が思つてる金神ではなさそうだけど、何か大きな、ありがたい神様を祀つておられるという、教祖さんのところへ参ることになりました。

そしたらその時教祖さんは、「私もいろいろ難儀に遭つてきたが、信心すればおかげを受けられるから、一緒に信心していこうではないか」と、親が子どもを抱くような、慈愛に満ちた様子で言つてくださいました。そしてさらに、日柄や方角などを見るに及ばないこと、神様は決して罰など当てられないし、信心すれば、どん

な願いでもかなえてくださることなどを教えてくださいました。

金光教には、「この神様は人を助け、願ひをかなえてやるのに忙しくて、罰など当てる暇はないとおっしゃる神様だ」という、そんな意味の教えも伝えられております。当時の人々が驚きもし、安心もしたに違いない教えで、私も初めて読んだ時、「罰など当てる暇はない」という部分を、面白いなあと思ひました。ただし、普段は優しい親が子どもを叱ることもあるように、その人の将来を思つてお叱りになることはあるそうで、その辺りは、なかなか厳しい神様のようなのです。

で、片岡さんは教祖さんの優しさ、教えのありがたさに感激して信心を始めたんですけど、

それまでは気性の激しい癩癩かんしゃく持ちで、人から何か悪いことでもされたら、すぐにしつぺ返しをする人だったそうです。しかしある時教祖さんから、「信心する者は、先方の心をどうぞ直してやってくださいと、拜んであげるようにならなければいけない」と言われて、それが強く身に染みました。

金光教は全国各地に教会がありまして、「信心によって得られる一番大きなおかげは、良くない性格がころっと変わることだ」と、そう教えておられる先生もおられますから、片岡さんもそのおかげを頂かれたわけですね。

そして片岡さんは、のちに地元の才崎で教会を開いて、人助けを始められました。広い広い田園地帯の村にできた教会で、はるか後年、昭

和30年代でも、当時の国鉄、今のJ Rの最寄り駅からバスに乗って、下りた停留所からさらに30分ほど歩いて、やっと着けたそうです。まして明治時代にはバスもなかったわけで、そんな遠い教会に大勢の信者さんが参っておられたというのは、片岡次郎四郎先生の徳の高さ、人助けの力の大きさが分かるお話です。

私は大阪市内にある、玉水教会という、明治38年にできた教会に通わせていただいておりますが、その初代教会長が片岡次郎四郎先生を尊敬しておられて、「片岡先生は、真まことで成就せぬことなしと言われた。真というものの価値を分かっておられたのです」と言っておられます。真というのは、まあ簡単に言えば、大きな真心のことでしょうね。

それから、もう一つ。私は金光教やその教会について、「優しく穏やかで親切だ」と、常々実感させてもらっておりますが、その後さらに発展した金光教才崎教会は、その特長をひときわ強く伝えておられるようです。

三代目の教会長の時代に、信者さんに連れられて一回だけ参拝した女性が、「親切なおじいさんの教会長で、私はその後信心はしなかったけど、その時励ましてくださった言葉を頼りに生きてきた」と、晩年に至るまでもらしたという話が残っております。

というところで、時間が来ました。来週は、嫁さんは大酒呑みだったという、舟で物を運ぶ仕事をしてた夫婦のお話をさせていただきます。ありがとうございます。



《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内4」

第4回

おはようございます。「かんべむさしの金光

教案内」。これは私が教典や教祖さんの伝記に接して、個人として、あるいはまた作家として、

「偉い人だなあ」と思った方や、「面白いなあ！」と感じたエピソードなどを、紹介させていただきます。

そこで4回目の今朝は、幕末から明治にかけてという時代に、周防の国、いまの山口県で信心を始められた、唐樋常蔵という方のお話をさせていただきます。

唐樋常蔵さんは、今は岩国市の一部になって

る由宇、理由の由に宇宙の宇と書いて由宇ですが、そこで生まれ育った人で、舟で物を運ぶ、水上運送業をしておられた方です。11歳の時父親が亡くなったので、子どもの身で一家を支え出したんだそうです。

そしてその由宇は、蓮根の産地として知られた土地でしたので、唐樋さんはそれを舟にたくさん積んで、備後の国の尾道まで運んだりもしてました。しかしこれ、山口県から広島県まで瀬戸内の海を行くわけですけど、帆掛け舟だったんでしょうかね。もし手漕ぎの舟で、延々と漕いで行ったんだったら、まあ、昔の人は大変だったんだなあと思います。

で、この唐樋さんは19歳で結婚したんですが、その奥さん、この場合は「嫁さん」と言ったほ

うがびつたりくるんですけど、嫁さんは大酒呑みでやんちゃな人だったそうです。

しかしその妻について唐樋さんはのちに、「私が連れ添うてやらねば、他に連れ添うてくれる者が無い。いとしい者じゃと思うて長年連れ添うておる」と言っておられます。ですからこのやんちゃというのも、「かわいらしい」という意味ではなさそうですね。

ですけど唐樋さんは、「あのような妻でも、私は今日まで、指一本も当てたことはない」と言い、信心を始めてからは、「連れ添うておればこそ妻であるが、別れてみれば人の大切な娘であり、神のかわいい氏子である。その氏子に手を当てることなどできない。仕事を手伝ってくれるのを、ありがたいと思っておりました」

とも、言っておられます。

いつも一緒に舟に乗って物を運んでるので、周囲の人がその舟のことを、夫婦丸ととつかまる、夫婦丸と呼んでたんだそうです。情景が眼に浮かぶような名前で、これも私が、面白いなあと思ったエピソードです。

さて。そこで、ですが。私は初めてこの話を読ませてもらった時、「はあつ。やっぱり偉い人はいるもんだなあ」と思いました。

というのが、毎日舟に乗って仕事をしてるんですから、日焼け風焼け潮焼けで、夫婦とも顔も手足も真っ黒だったでしょう。たぶん着物も粗末で、言葉遣いなんかも仕事柄、二人とも荒っぽかったんじゃないでしょうか。

つまりこの唐樋常蔵さん、外見としては粗野

で粗雑な印象を与えて、知らない人なら警戒したり、見下したりしたかもしれません。

しかしその内面、心は非常に奇麗で、優しく穏やかな人だったわけです。ですから私は、「なるほどなあ。こういう話があるから、人は見た目だけで判断してはいかんのだよな」と、改めて思ったんですね。

そして実際、教典には、その証拠になる話も載っております。当時、東ひがし周防すおうにも教祖さんの教えを受けた方が布教に来ておられたので、そのうわさを聞いた唐樋さんは、まずそこへ参拝して、良い教えであると感激しました。

それで明治2年の春に、例によって尾道までは舟、そこからは延々と歩いて、備中大谷の教祖さんのところにも参ったんですが、その初参

拜の時に早くも教祖さんから、

「あなたは周防の国で道を開いて、様々な難儀に苦しんでる人たちを助けてあげなさい」と告げられたんだそうです。教祖さんは唐樋さんの内面、奇麗な心を、その場で感じ取られたんでしょうね。

そして、その言葉に従って唐樋常蔵さんは、舟の仕事をやめて、人助けを始められました。明治14、15年頃には、周防の国でも1、2という実績をあげておられたそうです。

ちなみに、教祖さんが亡くなられたのは明治16年の10月ですが、その3カ月ほど前に唐樋先生に、自分が亡くなっても、「心配することはない。形を隠すだけである。肉体があれば、世せ上のじょう氏子が難儀するのを見るのが苦しい。体

がなくなれば、願うところへ行つて氏子を助けてやる」と告げておられます。

そして金光教は、その教えを信じて、今も受け継いでる宗教でもあるわけです。

ところで、最後に余談ですが、唐樋先生は人助けの道に入られたんですけど、そのあと、夫婦とと丸かまるの奥さんはどうなられたんでしょうね。酒を控えて、先生と共に、信者さんを助けていかれたんでしょうか。それともやつぱり、大酒呑みでやんちゃなままだったんでしょうか。まあ、作家の職業病とはいえ、こんなことばかり考へてるから、肝心の信心が、一向に進まないんですが…。

はい。それでは最終回の来週は、教祖さんが明治16年に亡くなられたのち、その跡を継がれ

た方のお話をさせていただきます。ありがとうございます。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内4」

第5回

おはようございます。「かんべむさしの金光教案内」。先週までの4回は、教祖さんの紹介と、その教えを受けて、のちには自分も人助けに励まれたという、当時の信者さんたちのお話をさせていただきました。そこで最終回の今朝は、教祖さんの跡を継がれた方のお話をさせていただきます。

教祖さんは、幕末から明治にかけてという時代、当時の備中大谷、いまの岡山県浅口市金光町で、農家のひと部屋に座り続けて、人助けに励まれました。参ってきた人の悩みや願いを神

様に取り次ぎ、その解決や成就を祈ってあげる。そして神様の思いをその人に伝えて、より良い生き方を教えていく。

ですからその伝統を守って、金光教は現在も、全国各地にあるどこの教会でも、全く同じ姿勢で、取次が続けられております。

しかし、その教祖さんは明治16年に亡くなられ、その息子さん二代目として、跡を継がれることになりました。大変真面目で、朴訥ぼくたくな方だったそうで、若い時代、毎年酒の仕込みの時期には、村の若者たちと一緒に造り酒屋へ出稼ぎに行ってたんですけど、休み時間にも用事を探して片付けてたので、雇い主から、「来年も来てください」と頼まれたという話が残っております。昔の農村地帯の暮らしぶりがよく分か

る、私の好きなエピソードの一つです。

そして、二代金光様は教祖さんと同じく、人々の悩みや願いを、毎日神様に祈ってあげておられたんですが、夜中にも神前で祈念しておられるようなので、ある信者さんが、「どうぞ御無理をなさいませんように」と申し上げたら、意外な答えが返ってきました。

「あれは私ではありません。亡くなられてから3年間、每晚12時を過ぎると、親様がお出ましになって、御神前で信者さん方のお届けを祈念してくださいました。それで不徳な私にも、御用が勤まってきたのです」

みたま
霊たまになつた教祖さんが、助けをくださつたということですが、私は初めてこのお話に接した時、「やつぱり、こういうことがあるんや

なあ」と思いました。「うそやろ」とは思わなかつたわけで、つまりまあ、金光教という宗教を、信じ始めてたんでしょね。

で、二代金光様は毎日毎晩、「参ってくる人の足音が、途絶えたら寝かせてもらい、聞こえたら起きます」という、早朝から深夜に至るまでの取次を続けられましたが、10年後の明治26年に亡くなられました。

そこで、そのまた息子さんが三代金光様になられたんですが、その時はまだ満13歳で、高等小学校を中退して、跡を継がれたんだそうです。ですから三代金光様はのちに、こんなことを言つておられます。

「初めのうちはつろうてつろうてよう泣きましたがなあ。親様の教えを守らしてもろうて、

泣く泣く辛抱しいしいに座つとりましたら、欲しいものも、考えることも、いつの間にかなくなりましてなあ。ありがたいがどうてならぬようになり、なんぼうお礼を申しても、足りませんのじゃ。お礼の足りませぬお詫びばかりしておりますが、もったいないことであります」

13歳の子どもですから、「つらくてつらくて、よく泣いた」という部分が実にリアルで正直で、そこが信用できる。もし第三者が、「最初から、ずば抜けた力を示された」なんて伝えてたら、私は眉につばを付けただろうと思いますね。

そして三代金光様は、明治大正から太平洋戦争を挟んで、昭和38年に亡くなられるまで、文字通り「十年一日」の毎日を繰り返されました。

午前2時から2時半に起きて、4時には金光教本部の御神前で祈念を始められる。

そのあと昼食抜きで夕方まで、参ってくる信者たちの悩みや願いを聞き取られる。夜は夜で、毎晩11時頃まで、いろいろの御用をされる。それを足かけ70年間続けられたんですから、これはやっぱり、「人間わざではない」という言葉が浮かんできますね。

教祖さん以来の伝統で、金光教は現在も、誰でも、信者でなくても、本部に参りさえすれば、金光様に直接お願いをさせていただけます。ある時、アメリカの宗教学者が本部に来たんですが、信者さんらしい女性が金光様にお問い合わせを申し上げてたので、それが終わるまで面談の順番待ちをしたそうで、宗教学者は、逆にそのこと

に感動したという話も残っております。

そして歳月が過ぎた現在、金光教は六代金光様の時代になっておりますが、教祖さん以来の基本姿勢や、日々の取次ぶり、温和で親切な雰囲気などは、全国各地、どこの教会でも、全く変わっておりません。

私は御縁を頂いた当初、自分が二十何年間も教会に通うとは、思ってもいませんでしたが、いつしか、「よくぞこの宗教に引張ってもらえたものだ」と感じるようになりました。それは素直に、ありがたいことだと思えます。

はい。というところで、時間が来ました。「かんばんむさしの金光教案内」、機会がございましたら、またいつかお話を。ありがとうございますました。



《平和》

「この神さんのおかげで助かったんですよ」

(ナレ) 金光教姫路西教会にお参りする黒岩緋佐子さん。昭和7年に、満州の奉天、今の瀋陽で生まれました。当時、黒岩さんの父親は満鉄に務めており、機関車の整備をしていました。転勤が多く、各地を転々としていたそうです。その頃、満州には金光教の教会がいくつもあり、現地の人たちが参拝していました。黒岩さんの母親も、家族で奉天に住んでいる時に、近所の方に誘われて、初めて教会にお参りしたそうです。母親が信心するようになり、黒岩さんも一緒に参拝するようになりました。

昭和19年、12歳の時に、黒岩さんは盲腸炎になります。

(黒岩) 診療所が近くにあったんですけどね、そこが盲腸ということをやよう見なくて。何か、食べ過ぎやとか何やとか言われて、時間が何日も経って。だから今度大きい病院行った時は、膿がね、膿だらけなのにそれが破れてしまつて、腹膜のほうへ回ってたんで。腹膜炎になつてたですからね。ひどかったですね。行った時に手術して。「よくこんなになるまでほつ」とか言うて先生に言われよりました、親がね。

腹帯いうんですか、それに御神米を置いてましたね。そしたら、主治医の先生が回ってこら

れた時に、「あんたは、この神さんのおかげで助かったんですよ」って言われたんですよ。「ハッ」と思って、私そんなに悪かったのかなと思いましたね、その時は本当に。

教会の先生から頂いた、祈りのこもった「御神米」を身に付けているのを見た、主治医の先生の言葉、「この神様のおかげで助かったんですよ」。この時初めて、黒岩さんのおかげを頂いていたことを実感しました。

そして、もしあと1年遅れて盲腸炎になっていたら、もっと大変なことになっていただろうと、当時を振り返ります。

1年後の昭和20年、日ソ中立条約を破り、ソ連が満州に侵攻してきたのです。

8月の10日ごろでしたかね、2階の窓から見ると、珍しく飛行機が5、6機ね、飛んでるんです。「あ、飛行機だ」と思ったらバンバンって機銃掃射みたいながあって。飛行機なんか見たことないのに、6機ほど飛行機が飛んでるんです。ほんとに怖いですね。日本の飛行機だと思って。そしたらロシアの飛行機だったんです。

それから、14日ですかね、臨時の人がメガホンで「逃げてくださいよ」と言うて回ってましたからね。最後の列車に乗ってくださいと言われて、窓から押してもらって乗って。トランクを持って、それを持って逃げられんから、その中から大事なもんだけね、パーツと。それで慌

てて乗ったんです。

夜中に走ってる時に、逃げてる時に明かりをつけたらね、飛行機に襲われるからって言うって、とにかく真っ暗で走りましたね。着いたのが鉄嶺てつりょうでしたかな。

鉄嶺に逃げてる時に、もう負けたということ、終戦を聞いたんです。

奉天の北東にある鉄嶺の町で、黒岩さんは、別行動をしていた父親と合流しました。その後、さらに北東の四平街しへいがいという町に移動します。

それから今度は四平街の満鉄の社宅がありましたね。その2階に変わって、空いてるところに3家族入ったんです。その時にロシアの兵隊

が1人入ってきました。初めてロシア人見て、恐かったですよ。銃剣持ってね、入ってきました。明け方でしたかね、なんか「ガチャン」いうすごい音がしたと思ったら、こんな大きい丈夫な銃前なんです。それを銃剣の柄でね、叩き落としてるんです。

私のそばで物をあさってたんです。何かいいもんないか。その時見たら、すごい刺青いれずみしてるんですよ。日本でしたら刺青なんかしてる兵隊さんなんかいないのに。そうやってあさって、母の時計を見つけてね。父が、「これも持っていけ」とか言うて、何にもないのに、そこらへんに掛けてある物とか出してました。

それからは入れ替わり立ち替わり中国の兵隊か、入ってきますね。鍵を閉めとつてもだめな

んです。入ってきて。ここに置いとった石鹼と
思ったらもうない。持って行ってるんですね。
もうそんなんでしたね。

いつ誰が入ってくるかも分からない。物を取
られても何も言えない。そのような中で、黒岩
さんは両親とともに生活し、引き揚げの船を待
ちました。そして、翌昭和21年7月、ようやく
通知が届き、在留日本人の引き揚げの拠点とな
っていた葫芦島ころうとうから、舞鶴に引き揚げることに
なります。黒岩さんは、次のように当時を振り
返ります。

家で盲腸になった、あれが逃げてる最中なん
かになったらね、命ないですわね。「おかげの

中に生かされてる」ていうんか。信心いうほど
できてませんけど、やっぱり信心してるからそう
いうことを思えますね。金光教を信心してる、
信心してますなんてえらそうなこと言えませ
けど、何か信仰してる言ったら、心強いですね。
何かあってもね。

引き揚げから76年が経ちました。その間、黒
岩さんは大きな病をいくつも経験してきました
が、その都度おかげを頂いています。「おかげ
の中に生かされている」。そう話す黒岩さんは、
89歳になる今も、元気に教会に参拝しています。

《平和》

「敵も味方もない」

(ナレ) 福岡県久留米市にある、金光教合衆教あいらく会にお参りしている稲垣明子いながきあけこさんに、戦争体験を伺いました。

90歳になる明子さんは、昭和6年、9人兄弟の長女として宮崎県で生まれました。今はとても明るく元気に過ごす明子さんですが、生まれてすぐに小児ぜんそくを患い、つらい幼少期を過ごしました。

(稲垣) 「もう死ぬ、もう死ぬ」って言うてましたね、発作が出るたんびに。そうした時に、祖母がしっかり私を抱いて、「金光様、金光様」

って言うてくれたことを覚えております。

祖父母の代から金光教の教会に参拝し、両親も毎日、朝早くからお参りしていたこともあり、困ったことがあると「金光様」と唱えていました。

10歳頃になると、ぜんそくは次第に治まっていきました。その頃、日本は戦争へと突き進んでゆきます。そして昭和20年、女学校に通っていた3月、宮崎県にも、空襲が始まりました。

宮崎は案外のおんびりしてて、空襲なんて全然なかったんですよ。でも、ある時その、空襲警報が出る前に、もう飛行機のほうが来て、そして、焼夷弾、あれをし出したんです。ほいでも

う学校もびっくりして、「早く防空壕に入んなさい」ってみんな言われて。そして友達が一人、遅れてきた友達が、機銃掃射に当たって、一人入り損なった友達が亡くなったですけどね。それから、「疎開をしなさい。疎開する所があったら、全部疎開しなさい」ってことに、なつたんです。

明子さん一家は親せきを頼って、今の福岡県みやま市に疎開しました。馬小屋を改装した家で、大家族での生活が始まりました。明子さんの父親は、一人で宮崎に残り、自動車などの部品を販売する仕事をしていました。そうしたこともあってか、お金が無くて困るといふことはあまり感じませんでした。しかし、物資の統制

や配給制度によって、お金があつても自由に買ひ物ができなくなりました。また、農家が、余分な野菜を自由に売ることも禁止されていまして。そんな中、とある農家から野菜を分けてもらえることを知つたのですが・・・。

それはもうねえ、食べ物が無いのが一番でした。もうほんとにね。だから、お母さんがかぼちゃを買いに行つたんです。で、やっと一個分けてもらつて、買って帰る時に、派出所の前を通つたもんだから、あの、エプロンの下にこう隠してたん。そしたらそれを、お巡りさんに見つかつて、それで没収されて、かぼちゃを。で、母はもう泣きながら、「警察に捕まつた、初めて警察に捕まつた」って、わんわん泣きながら、

帰ってきたのは覚えてますねえ。

配給以外の物は取り上げられる制度とはいえ、母が泣き崩れる姿と、警察から市民が厳しく監視されることに、大きなショックを受けました。

そして夏のある日、明子さん自身が、死を覚悟する出来事が起こりました。

きょうだい3人で、田んぼの向こうのほうに、ぶどうを作っている所があったから、買いに行っただんですね。で、田んぼの中を帰って帰る時に、突然、アメリカの飛行機が、低空飛行で来たんです。もう、空襲のあれも何もないままに。それでもう、パイロットの顔見えるん

ですよ。もう、にたーって笑いながら、その時に機銃掃射を始めた。あの、田んぼの溝があるんですね。その溝に、5歳の妹と、10歳の妹と、そして私が一番上になって、そして3人で「金光様、金光様」って唱えて。そしてそれを面白がって、機銃掃射で周りをずーっと……。それを道の向こうから母が見てたんです。もうほんとに狂ったようにして、私たちの名前を呼んでたんですよ、道の向こうから。

8月9日、ふと長崎方面の空を見ると、不思議な雲が見えました。

私が見たのはきこの雲。それが、見えたんです。「はあ、あの雲何だろう」っていうような

感じなんです。全く世の中とは遮断された感じですから、新聞もラジオも無い所にいてたもんですから。そして今考えたら、長崎の原爆だったんですよ。

そして8月15日、戦争は終わりました。当時の思いを伺いました。

戦争に対する思いは、ほんとに日本は負けて良かったっていうものだった。当時憲兵とかです、さっき言った巡查とか、もうすごい権力持っていましたからね。だからもし、負けてなかったらこの人たちがはびこって、もう虐げられるようなことだろうなと思って…。

敵から命を奪われそうになり、そして本来なら味方であるはずの警察からも虐げられる。戦争がどんどん人の心を狂わせていくことを感じました。

その後明子さんは24歳で結婚、夫と共に2人の子どもを育てました。自身や家族の病気など、困ったことがあっても、信心を力に乗り越えてきました。そして何より、つらい戦争を体験したからこそ、出会う人とは争うのではなく、少しでも気持ち良く関わっていきたく心がけています。

10年ほど前のこと、80歳にしてスポーツジムに通っていた明子さんは、そこで知り合った人の中に、どうしても気が合わない方がいたそうです。最初は避けていたのですが、ある日、は

つと、「神様が出会わせてくれたご縁なのに、仲間外れのようになつては申し訳ない」と思い直し、明子さんのほうから積極的にあいさつするようになりました。すると今では、楽しく語り合える間柄になったと言います。

身近なところから平和を願う姿を、明子さんから感じるのでした。



《教師インタビュー》

「一生懸命、丁寧に」

(ナレ) 岸野美輝さん、65歳。岸野さんは現在、滋賀県草津市にある金光教草津教会で奉仕しています。

今から約20年前、岸野さんは、自分や家族にいろいろなことが起こり、その結果、教会を出て生活をするようになりました。当時、岸野さんは40歳過ぎ。家族を抱えて、仕事を探すところから始まりました。

それまで何の経験も資格もない状態で、ようやく見つけたのは、病院で看護助手として認知症などの高齢者のお世話をする仕事でした。

(岸野) その初日、もうびっくりしました。1

日の大半は、数時間おきに排泄交換です。いわゆるおむつ交換。見よう見まねで始めたんですけれども、認知症の方が大半でしたので、じつとしてくださらない。手を当てられたり、かかれたりする。しかも、手先に便が付いたりしています。不用意に近づくと、襟をふっと持たれたり、時には髪の毛をぐっと持たれたりするんです。

もう逃げて帰りたい。「ああ、来るところを間違った」と思いました。お恥ずかしい話ですけども、それが偽らざる私の思いでした。

いつ辞めようかと悩む岸野さん。当時いろいろな悩みを相談をしていた金光教の先生のとこ

ろへ行きました。すると、先生は、こんなふう
に教えてくれました。

先生が、「それはな、あんたのために神様が
ご用意くださったお仕事やから、それを一生懸
命にな。そして、丁寧らせてもらいなさいや」
とおっしゃったんです。

「一生懸命」は分かるんですけども、「丁
寧」というのは、正直なところ、「先生、そう
おっしゃるけどね、そんな余裕ありませんわ。
もう毎日毎日『もう今日は辞めよう。今日は辞
めよう』の連続で、そんな丁寧な心になるよう
な余裕はありません」というのが、その時の私
の気持ちだったんです。けれども、不思議なこ
とに、今となってみますと、その丁寧さという

のが私自身の仕事を続ける大きな力になったと
いうことを、20年以上経ってから気が付いたよ
うなことなんです。

どうしてその辞めたかった仕事が続いたのか
というのは、いろいろとあるとは思いますが、す
けども、その1点が、清拭せいじきといまして、いわゆ
るおむつ交換をした後、便などで汚染した皮膚
を綺麗に拭き取ることがあるんです。当時準備
してました拭き取るタオルが、ちょっと時間
を置くと、すぐに冷えてしまっていました。そ
の冷えたタオルで陰部というか、おしもを拭か
せてもらうと、やっぱり皆さん「冷たい！
冷たい！」とおっしゃるんです。当然ですよ。
それが何かものすごく気の毒に思えたんです。

「ああ、これを水で拭かれたらたまらんなあ」

とあって、それで1回1回できるだけ温かい状態にしたんです。熱いお湯でタオルを絞っておしもを拭かさしていたとき、何をしても反応のなかった患者さんたちが、「ああ、ええ気持ちやなあ」「ああ、兄さん。おおきにおおきに」と思っても掛けない言葉をかけてくださったんです。それが私はもううれしくうれしくて。何か「本当に神様ありがとうございました。そして、「もっと喜んでいただけるように」と…これもね、私自身自身がそんな気になろうとしたんじゃないに、何かそんな気にならせていただいて、そして、もう気が付いたら、もうこの介護の仕事が苦にならないどころか、楽しみに変わってることに気が付いたんです。

仕事を始めた初日に辞めたいと思っていた岸野さんでしたが、患者さんたちに喜んでもらえたことがきっかけで16年もの間仕事を続けることができました。

「一生懸命に、丁寧に」と教えてくれた教会の先生には、その後たびたび相談し、助けももらいました。

岸野さんは、当時のことを振り返り、こうおっしゃいます。

よく考えてみると、家族のためとはいえ、「何でこんなことになってしまったんやろう」とか、「何でこんな仕事せんなんのやろう」と思ったことは、私一度もないんですね。まずそこで

助けられてきたというんでしょかね。

が多いですね。

金光教では、そうした働きを「神様のおかげ」と言いますけれども、こんな私でも最初から神様にそういうおかげを頂いてきてたということに気が付かせてもらったんですね。これは不思議なことでした。

その後、岸野さんの身の回りに起こっていた様々な出来事は落ち着きました。岸野さんは、長年にわたって施設で活躍されましたが、現在は教会に戻り、金光教教師として奉仕されています。

「冷えたタオルで気の毒やなあ」という気持ちにならされて、そういうことをさせてもらうような気になったのも、結局自分がそうしようと思っただんじやなしに、そういうふうにさせていたでいてきたということ。そして、そのことで、私自身仕事が続く元になってきたということ。そういうことに気が付かせてもらって…もうその連続だったと言っても過言ではないと、振り返ってみると、そのように思わされること

これまでの自分の体験から、「どんなことがあっても、神様は必ず助けてくださる」とおっしゃいます。

お参りされた人たちの話を親身になって聞き、寄り添っているその姿に、岸野さんの一生懸命さ、丁寧さ、そして優しさがにじみ出ていました。

《教師インタビュー》

「祈り」

(ナレ) 橋口美紀さんは、小学生の頃、いじめにあっていました。そのつらい気持ちを、大好きなおばあちゃんに打ち明けていたそうです。

その頃、橋口さんは京都に、おばあちゃんは大阪に住んでいました。橋口さんはお休みの日によくおばあちゃんを訪ねていました。

(橋口) 3年生の頃にやんちゃな女の子がいて、その子とかなかなかうまく折り合いがつかなくて、ちょっと、いじめみたいなことを受けてきました。その時に、祖母のひざの上で泣いて泣いて、「今は何とか行ってるけど、本当はもう

行きたくないんだー」って、ずーっと泣きながら言ってたんですね。そしたら祖母が、「おばあちゃんがずっと、神様をお願いしとくから」って言うてくれて。んー、ただ当時の私は、もう「何さ、それ」みたいな感じで。

橋口さんのおばあちゃんは金光教を信仰していたので、「神様をお願いしておく」と言うてくれたのです。

橋口さんはその後、家の事情で転校することになりました。引越し先は、おばあちゃんが奉仕している金光教天王寺教会でした。橋口さんは新しい小学校で5年生を迎えます。

「わあ助かったー」ってすごい思った記憶が

ありますね。で、小学5年生の時に、同じ時期に転校してきたSちゃんという子がいたんですね。初めてそこで友達ができて。で、Sちゃんも何か境遇が一緒に、「自分も前のところではじめられてたんよ」みたいな話になって。「わあ左利きやね。左利きでいじめられんかった？」

「そやねん」みたいなんで、仲良くなっていきましたね。そういう関係で、同じクラスにもなれて、もう小学校の最後の2年間は本当、Sちゃんとだけの学校生活やったのを覚えてます。

Sちゃんと仲良くなり、楽しい学校生活を送るようになった橋口さん。しかし小学校を卒業し、中学生になると、Sちゃんの様子が変わっていききました。

中学2年生になる前くらいから、「あれ、姿が見えない」ってなって、来たと思ったら保健室行くようになってしまっただけ。私も追っかけて、「Sちゃんどうしたの」みたいな感じで、「いや、もう教室が嫌やねん」みたいな話になって。

中学2年生の時に、本当に何かSちゃんが瘦せていったんですね、だんだん。リコーダーの穴が塞げないぐらい、指も痩せちゃって、ガリガリなっちゃって。で、その時に、「うわ、私じゃどうしようもできない」ってなって、祖母のところに行きついて、みたいな感じですね。その時に初めて、お広前に連れてってくれて、「ここには神様がいて、美紀ちゃんを守ってくれる存在だから、おばあちゃんと一緒に、手を

合わせて、Sちゃんのことを願ってあげようね」
って言われたんですけど、でもやっぱり見えな
いから信じれない。手を合わせましようとか言
われても、やっぱり拒絶したい気持ちのほうが強
くて。「何か先生と一緒に相談しに行くとかさ、
何かないの」ってすごい思ってたんですけど、そ
の時の祖母の真剣な顔を見て、「あ、きっと本
当に助かるかもしれない」っていう確証がちよ
っと芽生えて、で、手を合わせるようになりま
したね。こうやって、「Sちゃんが元気になり
ますように」とか、「そういうふうにお願いま
すらいいよ」とか言ってくれたんで、まあその
まま、毎日、お願いするようになりましたね。

おばあちゃんの真剣な様子を見て、橋口さん

はSちゃんのことを祈るようになりました。そ
の後、Sちゃんはまた転校してしまいました。

絶望でしたね。自分のイメージしてた助かり
とは全く違って、「え、転校しちゃうの」って。
私まだSちゃんといいたいの、っていう思いが
ぶわって出てきて、「やっぱり神様いないな」
ってすごい思いましたね。何か期待とか希望が
全部崩された感じでしたね、その時は。

でも、Sちゃんの顔が浮かぶと、神様にお願
いすることが、何か自然とパンとなるようにな
って。その時は、まあ願いながらも、「どう
せSちゃんも行っちゃったし、神様もおらんし」
とか思ってたんですけど、心はすごい反発して
んの、体は祈る方向に行ってるというか、「S

ちゃんが元気でありますように」と。その一言をずっと言っていましたね。

あの時短大生で、放課後よく私一人で残って、本読んだりとか、課題やったりとかしてたんですけど、その時に、またふっとSちゃん浮かんで。「Sちゃんも大学生になってるのかなあ」とか、「それとも働いてるのかなあ」とか、どろろしてるやろうと思って、「どうぞSちゃんが幸せでありますように」って願ってた時に、「あれ」って思って。「もしかしたら、うちの祖母もこういうふうに、私が小学生の時に、わんわん泣いてる私の姿を、ずっと思いながらこうやって手を合わせてくれてたのかなあ」って、何となくふっと思ってたんですよ。で、その時に、「ああそういうえば私、途中で、転校できたなあ。

もし神様という存在がいるのであれば、祖母が私に対してずっと手を合わせてくれて、私がどうぞ元気で楽しく学校生活送れるように願ってくれてたから、そういう転校っていう道を神様がもしかしたらつけてくれたのかなあ」、って思ってたんですよ。

Sちゃんのことかかってないと思ってたけど、実は違う形でかかってて、今はもしかしたらSちゃんが笑ってるかもしれないって、そんなふうにいるいろいろ考えるようになって。で、その時に何か急に、ああ、神様ってもしかしたらいるのかもしれないって思うようになりましたね。

信じてはいないけれど祈り続ける。その矛盾

した祈りの先にあつたのは、橋口さんもまたお
ばあちゃんの祈りに包まれていたという温かな
気づきでした。

Sちゃんが今どうしているのか、実際のところ、橋口さんには分かりません。ただ、橋口さんにとっては、大切な人を想い続ける心が、神様と出会うきっかけとなりました。

その後、金光教の教師となった橋口さん。Sちゃんのことはもちろん、人々の助かり、みんなの幸せに心を込めます。



《あなたへの手紙》第1回

「娘に友だちができない／父親が熱心な信者」

おはようございます。大阪府にあります金光教平野教会、宮下寿美です。

最初に、40代の女性からのご相談です。

「娘が、高校に入学しましたが、友だちができません。中学生の頃から、友だち関係でよくトラブルになっていました。人との距離感がつかめない様子です。親の目から見ても、ちょっと変わってるなあと思うので、普通になってほしいと思ってしまい、つい娘を責めてしまいます。最近では、仲間外れにされ、学校に行きたくな

いと言います。休ませると不登校になるのではないかと心配で、無理やり行かせています。どのように受け止めればいいのか」
このようなご相談です。

わが子が問題を抱えていると、「何とかしてあげたい」という気持ちがあります。私もね、子どもが幼稚園に通い始めた時にこんな経験をしたんです。同年代の子と遊び慣れていなかった息子は、かばんを手に持ち水筒を肩から提げたまま、教室の前のベンチに座って一日中過ぐす日が続きました。その時は、私も妻も、息子がかわいそうで、きゅつと胸が締め付けられました。なので、娘さんを愛おしむからこそ気がでないという気持ち、よく分かります。でも、

「かわいそう。何とかしなければ」。そういう気持ちが大きくなると、うまくいかないことになり立ち、子どもにきつく当たってしまうようになるので、気を付けないといけませんよね。

「楽しく学校生活を送ってもらいたい」「無事に卒業させてやりたい」。そんな願いは、不安やつらい気持ちも大きくなります。張り詰めた心を和らげるにはどうしたらいいかなあ。そのことを考えてみました。

お母さんは、娘さんの高校生活のことを悩んでおられますよね。でも、高校生の時間はほんの一部。むしろ、ここからの人生のほうが、はるかに長くなります。今のつらい時間に向けている心を、「娘が将来、伸びやかに生きていくために、何をしていくのが良いのかを考えてみ

よう」みたいに切り替えられると、心が楽になると思いますよ。どうでしょうか。思い切って、「つらいのなら、少し学校を休んでもいいよ。

これからのことを一緒に考えようね」。そんなふうに、娘さんに声をかけてあげてみるのもいいかもしれませんね。

心配することに力を使って疲れてしまうより、「将来のためになることを考えて、気が付くことはやってみよう」みたいな気持ちで、お二人が一緒の方向を見据えていくと良いのではないかなあ。神様は、ずっと先のことまで見通されて、幸せになれるようお膳立てくださいますよ。

次は、50代の女性からのご相談です。

「私は信心していません。父親が熱心な金光教の信者で、若い頃は反発ばかりしていました。私も年齢を重ね、信心について、『そういう世界もあるのだな。悪くもないな』と思い始めた矢先、検査に引つ掛かり病気が見つかりました。父親は、『参拝して、神様にお礼を申し上げてこい』と言います。病気になったのは仕方ないとして、どうして神様にお礼を言わなければならぬの…と、また反発がよみがえりました。信心する人ってどうしてこうなんでしょう」

このようなご相談です。

お体の具合は、いかがでしょうか。お見舞い申し上げます。

病気を告知された時は、衝撃と先の見通せな

い不安を抱えて、「一体これからどうなっていくのだろう」と胸を痛められたと思います。当人でしか知れない心細さ、募りますよね。そんな時に、お父様から「教会へ行つてこい」と一方的に言われても、素直になれない気持ち、とてもよく分かります。まして、「お礼をしに参拝してきなさい」と言われても、病気になりたくてなったわけではないわけですし、「お父さんの言うことは、いつも正論。でも、私の気持ちも知らないで、考えを押し付けないで」と反発心が芽生えるのは当然だと思います。一番つらいのは、あなた自身なのですから。

一方で、年齢を重ねられたお父様に、自分への接し方を変えてもらうのは難しい。そのことに気づいているのではないですか。イライラす

る原因は分かっているけど、解決の方法が見つからない状態。一体どうしたらいいの？ そんなジレンマを抱えてもがいているようにも思えます。

一つ、あなたの気持ちの中で、ありがたいなと思うのは、信心について、「そういう世界もあるのだな。悪くもないな」という思いを持つておられることです。それは、目には見えないけれども、自分を包み込む不思議な力、つまり神様の働きを感じているということだと思いません。なので、無理にお礼を言わなくてもいいので、お参りして、病気のこと、お父様への不満など、交々こもこもの思いを、教会の先生に打ち明けてみてはいかがですか？。不安や憤りの気持ちを打ち明けることができたなら、重たい気持ちも

和らぐものです。自分自身で一步を踏み出してみると、思いがけない気づきや発見があると思いますよ。納得できるような、神様にお礼する意味も見えるといいですね。

ご体調の快復を、私も祈念しております。どうぞ、お大切になさってください。

《あなたへの手紙》第2回

「神様をお願いしたのに良い点が取れない／死んだらどこに行くの？」

おはようございます。兵庫県にあります金光教三木教会の片島齋弘かたしまさひろです。よろしくお願います。

中学1年生、ひかる君からのご質問です。

「中学校に入り、最初の実力テストがあったので、お参りして神様をお願いしたのに、良い点が取れませんでした。どうしてですか？」

このようなお尋ねです。

せっかく神様をお願いしに行ったのに、テストの点数が悪かったとのこと。分かります。す

ごく分かります。私にも同じような経験があります。その時は、「神様をお願いしても意味がない」って思いましたね。それでもなぜか、テストがあるたびに近くの金光教の教会にお参りして、お願いしていました。

そんなある時、いつもは悪い点数ばかりなのに、たまたまいい点数が取れたことがあったんですね。その時も、いつものように教会に行つて、教会の先生とお話ししてからテストに挑んだんですが、テストが思う以上にできたもんだからうれしくて、それを教会の先生に報告しに、もう一度お参りしたんです。すると、満面の笑みで、「本当によく頑張ったね」と言ってくれました。そして先生はその後、ご神前に向かって座り直し、「ありがとうございます。テ

ストを受けることができ、頑張った実力を発揮
することができました。ありがとうございま
す」。そう声に出して神様にお礼を言ってくれ
ました。その時の言葉が私には衝撃的で、「あ
っ、そうか、テストで点を取るには、まず元氣
に学校に行かないといけないし、勉強を頑張る
やる気もある。神様はテストの点数が良い悪い
関係なく、サポートしてくれていたんだ」。そ
んなふうに思えたんです。

金光教の教祖は、「神様は氏子の親神である」
と伝えていきます。神様を「親」と表現していま
す。私も3人の子どもの親ですが、子どもの幸
せのためなら、どんな事でもしてあげたくなり
ます。すがられると何とかしてあげたくなるん
です。それと同じ心なのが神様なんです。

ひかる君、テストもそうだけど、誰でも生き
ていく中で、思い通りに行く時と、行かない時
があると思います。思い通りにいかない悔し
いけれど、ここで言いたいのは、神様はお願い
されると、何とかしてあげたくなるということ。
思いどおりにならなかつた時も、ひかる君の幸
せや、お願い事が叶うために最善を尽くしてく
れているということです。だからこれからも、
いろいろな問題があると思うけれど、どんなこ
とでも神様にお願ひして、チャレンジしていっ
てくださいね。必ずそばで神様が応援してくれ
ますからね。私もひかる君のこれからを応援し
ています。

次に35歳女性からこんな質問を頂きました。

「7歳になる息子は、好奇心旺盛で、気になったことは『なんで？ どうして？』と尋ねてきます。先日、近所のお友達のお父さんが、急に亡くなってしまった時に、『人は死んだらどこに行くの？』と尋ねてきました。金光教ではどういうふうを考えておられますか？」

このようなお尋ねです。

息子さんにとって、お友達のお父さんの死というのは、身近なところでもあり、衝撃的だったんでしょうね。私も幼い頃、お世話になった人が死んで、「もしかしたら、お父さん、お母さんも死んでしまうかもしれない」と不安になって、「お父さん、お母さん、死なないよね」って何度も確認したことを覚えています。

さて、人は死んだらどこへ行くのかという質問ですが、金光教では、人は死んだら姿形がなくなるだけで、この天と地の間で、姿形を変えて私たちを守ってくれていると教えられています。

「本当に？」と思うかもしれませんが、先日こんなことがあったんです。彌生よよいさんという60代の女性が、両親を亡くされた後、両親の住んでいた家を取り壊すことになったので、家のお祓はらいをしてほしいと頼みに来られました。というのも、彌生さんには心配なことがあったんです。それは、その家の庭に、石で作られた土地を守る神様が祀まつってあって、それをどう処分したらいいか分からないとのことでした。石屋さんに相談したら石屋さんは、お祓はらいをした後、

石を砕いて土に埋めると言われたそうです。それを聞いた彌生さんは、「神様の石を砕いて埋

めるなんて、ばちが当たるんじゃないか」と心配されていました。私は、「お祓いの御神事も丁寧にさせていたたくし、絶対に大丈夫だから安心して」と言葉を尽くして話すのですが、やはり不安なようでした。

それが、御神事をする前日、彌生さんが不思議な夢を見たとき、目を輝かせて教会にいられたんです。彌生さんの両親が初めて夢に出てきて、お父様が石の前に立って、「大丈夫やで」と彌生さんに声を掛け、そのそばでお母さんの明るい笑い声が響き渡っていた、そんな夢だったそうです。彌生さんは、「両親が二人して私の不安を取り除こうとしてくれたんだと思います

た。これで安心できました」。そう涙を流して話してくれました。

亡くなるというのはとても悲しいことですが、でも、亡くなっても、姿形は見えないけれど、こうやって子どもを祈り、あらゆる手を使って私たちを見守り助けてくれているんだと私は信じています。

お尋ねありがとうございます。

《あなたへの手紙》第3回

「ちよつとしたことでイライラする／＼どうして信心するのか」

おはようございます。三重県にあります金光
教松^{まつさか}阪^{はん}新^{しん}町^{まち}教会の水野^{みずの}照^{てる}雄^おと申します。よろしく
お願いします。

最初は、匿名希望35歳の男性の方です。

「私は、ちよつとしたことでイライラしてしま
う性格なんです。イライラするだけならいい
のですが、収まりがきかず、自分の物を壊して
ストレス発散してしまいます。このちよつとし
たことでイライラする性格を直したいのです
が、どうしたらいいでしょうか？」

このようなお悩みです。

ね、厄介ですよ。自分の心なのに、自分の
思いどおりにならなかつたり、ついカツとなっ
てしまつたり。

でも、「イライラする性格」と言われるのも、
一面、完璧主義であつたり、しかも早く結果を
出すことを求めたりと、そういうところが、匿
名さんご自身の中にあるのではないですか？

もしそうだとしたら、それは、決して悪いこと
ばかりでもなくて、仕事の上とかでプラスに働
いている場面もあるように思うのです。

なので、この性格という多面的でややこしい
問題は置いといて、まず自分の物を壊してしま
うというところから考えてみたいと思うんで

す。

匿名さんの場合、自分の物を壊しているんですよね。人の物を壊したら、それこそ犯罪ですけど、自分の物なら、まあええじゃないかと言えなくもない。誰に迷惑をかけている訳でもないのですから。

で、今日のお悩みは解決しました：とはならないんですね。それはそうだろうけど、でもね：というところが、実は大事なんだと思います。

そこで、一つ提案があります。「怒りの家計簿」、あるいは「出納帳」。そんなものをつけてみてはどうでしょうか。まず表を準備して日付。次に怒りの対象・原因。何で腹が立ったか。そして、その怒りの大きさ。どれぐらい腹が立ったのか、主観でいいので数字にしてみます。

で、今度は壊した物の価格。いくらで買ったか、

その値段。それと価値。これは匿名さん自身思い入れを含めた値打ちを記入します。最後に、その収支を差し引きするわけです。壊してしまった物の値打ちと、怒りの大きさを比較して、損をしたか、仕方ないと思えるか、プラスマイナスの数字にしてみるのです。

もちろん、腹が立っている最中には無理でしょう。一段落して心が落ち着いてからでいいので、振り返ってみてはどうかと思うのです。

そんな面倒くさいこと、と思われるかもしれませんが、でも、やってみる価値はあると思います。しばらく続けてみると、そのうちに、何かに変化が起こってくるのではないかと期待しています。すぐには難しいかもしれませんが、

きつと。

よろしければご報告をお待ちしています。

次は、42歳の男性、堺さんという方です。

「妻は、子どもの頃から金光教の教会に家族で参拝している。私も妻と一緒に教会に参拝しているが、次のようなことが気になっている。

妻は、願っていたことがうまくいけば、神様のおかげと言い、失敗すると、自分の信心が足りないからと言う。そんな妻の様子を見ると、どうして信心するのか分からなくなってくる」
このようなご相談です。

堺さん、奥様とご一緒に教会へお参りいただきありがとうございます。まず感じたのは、い

ろんなことをちゃんと話し合うことができています。そんな良い関係のご夫婦なんだろうなという事です。

それから、堺さんご自身が、金光教というか、信仰ということにある種の期待を持ってくださっているということも感じました。

で、お尋ねの内容ですが、うまくいったら神様の手柄、失敗したら自分の責任、それではつまらんじゃないかと、こういうことでしょうか。「あまりにも自己否定的というか、もうちょっと自分の努力を認めてもいいんじゃない？」という、奥様への思いということかもしれません。なるほど「信心が足りない」と言われると、

確かにそんなふうに感じられるかもしれませんが。でも、言葉はそんな感じですけど、その意

味は、それほど神様一辺倒でもないと思うので
す。

神様をお願いしても、うまくいくこともあれば、
いけないこともある。これはもう実際問題、
そうです。だったらお願いしてもしなくても同
じやないか、とは、信心している人は考えませ
ん。うまくいったかどうかというのも大事です
が、それと同じくらいか、場合によってはもっ
と大事になってくるのが、そこに何かあるとい
う感覚です。

例えばうまくいった時、自分も頑張ったけど、
よくよく考えてみると、その努力が報われるよ
うな何か、あるいは自分の頑張りを超えた何か
があるように感じる。

逆にうまくいかなかった時には、自分は努力

したけど報われなかった。でも、その事実の中
に何かがある。自分が気づかなかった足りない
点があるのかもしれないし、後になって振り返
れば、このほうが良かったと思えるのかもしれ
ない。

奥様は、そうやって起こってくる出来事の中
に、神様のメッセージを受け取るうとしておら
れるのではないかと思うのです。

そして、これは仕事や勉強、何でもそうです
が、人は失敗からこそより多くを学ぶことがで
きます。とすれば、うまくいかなかった時にこ
そ、そこに大切な何かが見つけ出されるはずで、
奥様が「信心が足りなかった」と言われるのは、
単に否定の言葉ではなくて、もっと何かがある
はず、もっとそれを知りたい、求めたいという、

とても前向きな信仰の表明だと思うのです。

ちよつと硬くなつてしまつて申し訳ありません。

堺さんご夫婦にとって、これからも教会が良い場所でありますように。そして、ご夫婦の教会参拝が、お二人の人生にとって良い経験となつて積み重ねられていきますようにお祈りいたします。



《あなたへの手紙》第4回

「認知症の母の介護／会話ができない息子」

おはようございます。福岡県・金光教不知火教会の池本いけもとひろ江えです。よろしくお願いします。

認知症のお母さんの介護を一生懸命されている40代の女性のお悩みです。

「認知症の母親に優しくできません。母は、自分の娘であることを認識できている時と、そうでない時があります。調子のいい時は2人で楽しく笑い合える時もありますが、決まりきったことができなかつたり、同じ間違いを繰り返したりすると、きつく言ってしまう。母は、

叱られたことを忘れていますが、私の中では罪悪感が増していき、後悔ばかりしています。どうすればいいでしょうか」

このようなお悩みです。

私も、同居している認知症の母の介護をしているので、葛藤されるお気持ち、すつごく分かります。私の場合は、教会の先生に心の苦しみを聞いてもらったことから、介護の向き合い方が変わって、とつても穏やかな気持ちで、お世話ができるようになりました。

介護で困っていた私に、教会の先生は、「お世話をしているだけではなくて、あなたも、得ているものがあるのだよ」と言ってくださり、目から鱗が落ちるような思いになって、介護に

対する私の見方が少し変わったんですよね。

教会で話を聞いてもらって、心が軽くなると、狭くなっていった視野が広がって、「私と母と穏やかに過ごせる方法を探してみよう！」と、前向きな気持ちになりました。

私が穏やかだと、母も穏やかで笑顔が増えて、「ありがたかかねー、もったいなかかねー」という感謝の言葉を言ってくれるようになりました。

「介護は、親の最後の子育て」と、介護士さんが、教えてくれたんですが、教会の先生の言葉とつながって、「私が得ているもの」に気づけるようになったんです。

例えば、私はとつてもせっかちなんですが、何でも時間がかかる母のおかげで、「寄り添いながら待つ」ということができるようになって

きました。「認知症の母との時間は、悔いのない親孝行をするチャンスかも」と思えるようにもなってきたんですよ。

といつても、親の老いと向き合うということは、容易なことではありません。きつさをため込まず、吐き出すことが大切だと思います。金光教の教会では、じっくり話を聞いてもらえますので、よかったらお近くの教会へ参拝してみてくださいでしょうか。きっと、あなたの支えとなるものが得られると思います。

次は、佐賀県在住、30代の子育てに奮闘されているお母さんのお悩みです。

「子どものことで悩んでいます。私には小学校6年生になる男の子がいるのですが、人との関

わり方がとても苦手です。学校から帰ってきても遊びにも行きませんし、スーパーで買い物をしている時、学校の同級生に会うと、隠れる始末です。『なぜ隠れるの?』と聞くと、『何を話せばいいか分からない』と言います。何とか普通に会話ができるようになってほしいと願って、会話の仕方を教えたりするのですが、なかなかできません。本人もそれを言われるのが嫌みたいです。これからの将来が不安です。言い過ぎるのもかわいそうですし、どうしたらいいか分かりません。何かアドバイスを下さい」

このようなお悩みです。

一生懸命子育てをされているのですね。「友達と交流して、楽しい時間を過ごしてほしい」。

子どもの幸せを願う親ならば、誰もが願うことだと思えます。私も3人の子どもの親なので、お気持ちよく分かります。

私の場合ですが、子どもの幸せを思うあまりに、いつのまにか、一般的な「普通とされるもの」と比較して、できないところばかりが気になっていました。「普通」という枠を外して、ありのままの子どもを見るということ、子どもが持つ力を信じていることが、なかなかできませんでした。そういうこと、ありませんか?

例えば、息子さんは、「何を話していいか分からない」と言われていますが、話したい気持ちは、あるんだと思います。その気持ちを大切にしたいですね。親ができることとして、子どもの持つ力を、信じて、引き出すお手伝い

なのかなあと思うんです。

なので、息子さんが感じていること、思っていること、どんなささいなことでも、息子さんの話を肯定して、じっくり聞いてあげてください。

それから、「自分が育てなきゃ！」と力まな
いでいいと思いますよ。私は子育ての中で、一
番強く感じたのは、「親だけが子どもを育てる
のではない」ということです。子どもたちが出
会う、人や出来事や環境など、すべての中に、
子どもたちを育てよう、個性を引き出そうとす
る、神様のお働きがあったように思うんです。
その働きを信じてみると、思いがけないことが、
息子さんの持っている力を伸ばすことにつなが
るかもしれません。神様に子どもさんのことを

お願いしながら、心配をあずけて、神様と一緒に、子育てをしてみませんか？

金光教本部 ラジオ放送係

住所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

朝日放送 日曜日 あさ5時40分

放送センターHP
「ここで聴く
おはなし」



「ここで
聴くおはなし
Podcast」



放送後の音声はWebサイトやPodcastで聴くことができます。